

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02282

研究課題名(和文)加藤周一を軸とした戦後日本思想の検証

研究課題名(英文) Japanese thought of the post-war in Eastern-Northern Asia---to mainly appreciate Kato Shuichi's works

研究代表者

鷲巣 力 (WASHIZU, TSUTOMU)

立命館大学・衣笠総合研究機構・教授

研究者番号：30712210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間中に研究対象の中心である加藤周一の歿後10年(2018年)と生誕百年(2019年)を迎えた。そこで加藤周一という戦後日本を代表する知識人を多くの人に理解してもらうために、2018年度は立命館大学土曜講座の連続講演会を催した。2019年度は東京・日仏会館と共催の「加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム」を開き、立命館側は「東アジアにおける加藤周一」という主題を設けて、中国・韓国の研究者4人を招聘して、加藤周一の思想が東アジアにとって、どのような意味をもつかについて議論した。両年の二つの講演会は多くの市民の参加を得た。また『加藤周一 青春ノート』と『称えることば 悼むことば』を上梓した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は戦後日本を代表する国際的知識人である加藤周一を戦後日本思想史のなかに位置づける研究である。その基礎作業として、加藤の遺した手稿ノートを分析し、これをデジタルアーカイブ化している。このデジタルアーカイブはキーワード検索が可能なシステムとして構築されているが、次代のデジタルアーカイブの基本を提起しているといえる。

研究成果発表として、幾つもの公開講演会を行っており、市民が積極的に参加することができる。また2019年度に始めた加藤周一文庫公開講演会も、参加者は市民であり、しかも参加者が回を追うごとに増えているという事実、学問研究の社会的還元としての意義があらわれていると考えている。

研究成果の概要(英文)：The subject of the research is the thought and behavior of Kato Shuichi who was a typical intellectual in the post-war Japan. He was born in 1919 and passed away in 2008. We held the ten years memorial symposium after his death in 2018 and the centennial symposium of his birth in 2019. The symposium in 2019 was held under the joint of Ritsumeikan University and Maison franco-japonaise and was named "Kato Shuichi in the northeastern Asia" and we invited four researchers from China and Korea. Citizen as well as researchers took part in the symposium. Moreover Research center of Kato Shuichi has entered into cooperation with Research center Maruyama Masao in Tokyo Women University and the same exhibitions made by two centers have twice been on show.

We published two books titled "The Notes of Kato Shuichi in his Youth" and "Recommendations and Condolences" written by Kato Shuichi. And Kato's 14 handwriting notes has been opened to the public as the digital archives for three years.

研究分野：戦後日本思想史

キーワード：加藤周一 戦後日本思想 雑種文化論 近代化 戦争体験 東アジア 丸山眞男 林達夫

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2014(平成26)年度から2016(平成28)年度にかけて進めてきた「加藤周一の思想史研究」(基盤研究(C))を継承・発展させるものであった。戦後日本を代表する国際的知識人加藤周一(1919-2008)の思想と行動を、戦後日本思想史のなかに正当に位置づける研究として構想されたのである。

その契機として、加藤周一の遺した蔵書・資料が立命館大学に寄贈されたことがある。立命館大学は、加藤の蔵書・資料を活用し、研究を進める優位性を確保したと同時に、蔵書・資料の公開とそれらに基づく研究を行なうという社会的義務を負ったのである。こうして立命館大学は2015(平成27)年に「加藤周一現代思想研究センター」を設立し、2016(平成28)年に図書館内に「加藤周一文庫」を創設した。

その学術的背景には、日本における加藤周一に関する研究は低調であり、ほぼ手つかずの状態のままに残されていたことがある。ジャーナリズムでの評価は高いが、アカデミーにおける評価は必ずしも高くない。ところが、海外での加藤に対する評価は日本に比べて高い。加藤の著書がのべで50冊もが海外で翻訳出版されているという事実、それが現れているだろう。この隔たりは何故に生ずるのか、この隔たりを生んだ要因に、日本の思想史研究、あるいは人文社会系研究の問題点が潜んでいるのではないかとわれわれは考えた。

加藤が関心をもち、研究対象とした領域はあまりに広い。文学や文学史はいうに及ばず、美術や芸術にも拡がり、さらに社会的・政治的問題にも強い関心を示した。しかもたんに関心領域が広いというだけでなく、問題はたえず総合的・全体的に捉えられた。たとえば、江戸時代の本居宣長を論ずるに、ハンガリーの音楽家バルトークを引合いに出し、20世紀オーストリアの政治家ワルトハイムに及んだ。

このような加藤の思想と行動を研究するには、丸山眞男や大江健三郎が指摘するように、「一人では研究できない」のである。本研究を進めるには、学内外、国内外の人文・社会系研究者の共同研究として進める必要があった(研究方法の中の研究体制の項を参照)。

加藤周一を理解するには、加藤周一だけを研究対象としていたのではおぼつかないことはいうまでもない。加藤周一と同時代の独創的な思想家 丸山眞男、林達夫、鶴見俊輔などと比較対照する研究が必要であるとの認識ももっていた。また加藤周一が自らの思想を形成するうえで大きな影響を受けたフランス思想・フランス文化も視野に収めないとならない。そういう認識のもとに、共同研究者を募り、講演講師を依頼し、かつ東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターとの研究提携や、東京・日仏会館との提携関係の構築に向けた研究体制をつくったのである。

2. 研究の目的

本研究には主として4つの目的を設けた。

(1) 手稿ノートのデジタルアーカイブ化とその出版

加藤は、青春期から晩年に到るまで、膨大な手稿ノートを書きつづった。この手稿ノートは加藤の思想形成や著作活動を理解するうえで不可欠の資料である。研究目的の第一は、この「手稿ノート」の精査とそのデジタルアーカイブ化を進めることである。本研究期間中にデジタルアーカイブ化する「手稿ノート」は、毎年最低2冊、原則6冊を予定した。

さらに手稿ノートを出版することである。すでに2016(平成28)年にデジタルアーカイブ化されていた8冊の『青春ノート』が人文書院から抄録として出版されることが決まっていた。他の「手稿ノート」も可能なかぎり冊子体として出版し、デジタル情報に馴染めない人に供することも目的とした。なお『加藤周一日記』(仮題)が平凡社から刊行される予定である。

「手稿ノート」の整理作業は若手研究者や大学院生らを中心に進める。整理作業は根本資料に直接に当たれる稀な機会であり、若手研究者にそういう機会を有効に活用してもらうことも、ひとつの目的と考えたからである。

(2) 加藤周一を軸にした戦後思想の検証

本研究の最大の目的となるが、「加藤周一を軸にして戦後思想を検証する」ことである。加藤の思想と行動を、同時代の丸山眞男、林達夫、鶴見俊輔と比較対照しながら、加藤の思想の特徴と意義について検証することを目的とする。加藤と丸山、加藤と林、加藤と鶴見には、それぞれ共通する側面と異なる側面をもつ。また、この四人には戦後思想の中核である民主主義と反戦において共通する。

丸山も加藤も、戦争体験から、日本人の思想とは何かという主題を着想した。「戦後思想」は戦後に急に新しい考え方が生まれたわけではない。伝統的な考え方が戦後にも生き続けている。丸山は日本思想史に貫かれる「古層」を、加藤は「土着的世界観」を、日本の思想を解く鍵概念として提示した。この「古層」と「土着的世界観」が、戦後思想にも通底していることを検証し、加藤や丸山の思想を分析し、戦後思想を日本思想史のなかに位置づけたい。

林と加藤に共通するのは啓蒙精神であり、啓蒙精神は戦後思想の特徴でもある。林も加藤も啓蒙精神をもっていたからこそ百科事典の編集長に就いた。しかし、ふたりが編集にかかわった百科事典は、その特徴を大きく異にする。ふたつの百科事典の違いから、林と加藤の思想の違いと、戦後思想の変化が析出されるに違いない。

鶴見と加藤に共通するのは、大衆、なかでも社会的弱者の立場に立った言動である。知識人

が積極的に社会的弱者の立場に立った言動を展開するというのも戦後思想の特徴のひとつである。これに対して、ふたりに相違することは政治的活動に対する姿勢である。このふたりの思想の対比からも、鶴見と加藤の思想の違いや戦後思想とは何かを明らかにしていきたい。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターと立命館大学加藤周一現代思想研究センターは研究における提携を合意した。この提携を深めるために、研究センター員の交流や、研究の新しい方法を構築することも目指す。

(3) 雑種文化論の検討

研究の目的(2)は総論的であるが、研究の目的(3)と(4)とは各論となる。第3の目的は加藤がフランス留学から帰国した1955年に次々と発表した「雑種文化論」の検討である。

留学中にフランス文化を中心にしてヨーロッパ文化に接した加藤は、近代ヨーロッパの文化が純粋文化であるのと対照的に、近代日本の文化は雑種文化であると指摘し、雑種文化であることに積極的意味を見出した。「雑種文化論」は「近代化の方法論」の範疇で捉えられる議論であった。

そもそも「近代化」は西欧出自の概念である。20世紀後半となると非西欧の国々でも「近代化」を標榜しない国はない。ところが、非西欧国が近代化を進めると、自国の伝統的文化との相克、軋轢が生じる。そのとき「雑種文化論」以外の近代化の方法はありうるだろうか、という議論が導きだされる。すなわち、「雑種文化論」がもつ妥当性と可能性に関する議論となるはずである。したがって、日本社会を対象とするだけでなく、身近なところでいえば、雑種文化論の韓国社会における妥当性、中国社会における妥当性について検討する必要があると考えた。

戦後思想を考える場合、加藤の「雑種文化論」は避けて通れない論文と位置づけられている。しかし、それだけではなく、加藤が提起した「雑種文化論」は、東アジアなど非西欧国にとっても重要な問題となるはずである。

(4) 『日本文学史序説』研究

加藤はさまざまな外国文化から影響を受けた。とりわけフランス文化、フランス文化のなかの中世文化を見たことが大きい。『続羊の歌』(岩波書店、1968)の「中世」の章には、次のように書かれる。

「私はフランス人が、事ある毎に《ランスの微笑》や《ピエタ・ダヴィニョンの精神》を引き合いに出すのを聞いて、彼らの文化と造形的世界との関係が、われわれの場合とはちがうと考えないわけにはゆかなかった。(中略)その知的社会の全体のなかに歴史的な美術の占める位置

その重みと役割が、ちがっていたということである。(中略)現に私は、何よりも日本の美術史を辿って、その精神史との密接不可分な関係を考えるようになった。」(同上書84頁)

フランス留学中に中世美術を発見したことから「雑種文化論」という考え方が生まれ、雑種文化は近代日本だけのことではなく、日本文学史、日本美術史にも妥当するだろうという仮説を立て、それを検証した結果が『日本文学史序説』と『日本 その心とかたち』ということになる。

以上のことを踏まえて、本研究第四の目的は、加藤の『日本文学史序説』を精読することによって、加藤が日本人のものの考え方の特徴として何をどのように掴んだかを考えたい。日本文学通史は国文研究者をはじめ日本の研究者にはなかなか受け容れられない。津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』も加藤の『日本文学史序説』も、国文研究者にはあまり読まれない。しかし、国際評価に足る文学史研究を目指すとき、加藤の文学史研究から示唆を得ることは多いと考える。

3. 研究の方法

(1) 研究方法

概要

第1段階に研究の基礎となる「手稿ノート」の整理作業およびデジタルアーカイブ化、第2段階に「加藤周一を軸とした戦後思想の検証」、そして第3段階にその成果を、公開講演会や研究会報告書作成、出版物の刊行によって、社会発信するという3つの過程をもつ。

キーワード抽出

第1段階の「手稿ノート」の整理作業およびデジタルアーカイブ化は、キーワード検索が可能なアーカイブとして構築する。この構築作業は手稿ノートからキーワードを抽出するわけであり、とりもなおさず、加藤の思想のキーワードを抽出する作業となる。これをADEAC(デジタルアーカイブシステム)に搭載することで、ADEACに属する他の大学や図書館等が構築したデータベースとの関連性が生まれることになる。このシステムが普及することで、学問における情報検索は格段に拡大し、効率的になるはずである。

研究会・講演会

第2段階の研究は、各研究者における研究を各年数回行われる研究会で報告・討議を行ない、理解を深める。本研究では、東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターと立命館大学の加藤周一現代思想研究センターとの提携を視野に収めて進める。

社会的発信

第3段階の社会的発信は、年に一度の加藤周一記念講演会を継続的にもち、あるいは出版物を刊行する。本研究2年度目の2018(平成30)年は加藤周一歿後10周年に当たり、立命館大

学士曜講座の連続講演会を予定した。また、最終年度の2019(平成31)年は、加藤周一生誕百年にあたり、立命館大学加藤周一現代思想研究センターと東京・日仏会館と国際シンポジウムを共催することで合意した。

(2) 研究体制

本研究にかかわる研究者は、拠点である立命館大学の研究者のみならず、学外の研究者やジャーナリズムで活躍する研究者がいることを踏まえて、いくつかの分科会をつくった。研究体制は研究方法と深く関連するので、その概要を以下に記す。

総括責任 = 鷲巣 力 (代表研究者、近代日本思想史、立命館大学招聘研究教員 (教授))

第一部門 (主たる研究: 加藤周一を軸とした戦後思想の検証)

第一分科会 (加藤周一と丸山眞男 日本思想の変化と持続)

小関素明 (分科会責任者、分担研究者、日本政治思想史、立命館大学教授)

樋口陽一 (分担研究者、憲法学、日本学士院会員、東京大学名誉教授、加藤文庫顧問)

田中 聡 (協力研究者、京都学、立命館大学教授)

野口雅弘 (協力研究者、政治学・政治思想史、成蹊大学教授)

猪原 透 (協力研究者、日本史、立命館大学非常勤講師、連絡係)

第二分科会 (加藤周一と林達夫 百科事典の精神)

鷲巣 力 (分科会責任者、代表研究者、同上、連絡係)

加國尚志 (分担研究者、フランス思想・哲学、立命館大学教授)

三浦信孝 (分担研究者、フランス思想・文学、中央大学名誉教授、日仏会館副理事長)

湯浅俊彦 (分担研究者、図書館学、立命館大学教授)

龍澤 武 (協力研究者、出版学、東アジア出版人会議事務局長)

石塚純一 (協力研究者、ジャーナリズム論、民俗学、前札幌大学教授、法政大学非常勤講師)

第三分科会 (加藤周一と鶴見俊輔 大衆性と政治性)

渡辺公三 (分科会責任者、分担研究者、文化人類学、立命館大学教授、同副総長)

桜井 均 (分担研究者、映像学、立正大学教授)

田中 聡 (協力研究者、同上)

根津朝彦 (協力研究者、ジャーナリズム論、立命館大学准教授)

福間良明 (協力研究者、近代日本史、立命館大学教授)

石塚純一 (協力研究者、同上)

西澤忠志 (協力研究者、立命館大学先端研院生、連絡係)

第四分科会 (加藤周一とフランス文化)

加國尚志 (分科会責任者、分担研究者)

住田翔子 (協力研究者、美術史、立命館大学非常勤講師)

樋口陽一 (分担研究者、同上)

三浦信孝 (分担研究者、同上)

ジュリー・ブロック (協力研究者、近代日本文学、京都工芸繊維大学教授)

セシル・坂井 (協力研究者、近代日本文学、パリ第七大学教授、日仏会館フランス事務所長)

半田侑子 (立命館大学衣笠総合研究機構研究員、加藤周一論、立命館大学研究員、連絡係)

第五分科会 (加藤周一の思想史・文学史研究)

中川成美 (分科会責任者、分担研究者、近代日本文学)

小関素明 (分担研究者、同上)

野口雅弘 (連携研究者、同上)

彭 佳紅 (協力研究者、近代日本文学、帝塚山学院大学教授)

ソーニャ・アンツェン (海外協力研究者、日本文学、トロント大学名誉教授)

猪原 透 (協力研究者、同上、連絡係)

第六分科会 (海外における加藤の評価)

渡辺公三 (分科会責任者、分担研究者、同上)

彭 佳紅 (協力研究者、同上)

ジュリー・ブロック (協力研究者、同上)

ソーニャ・アンツェン (協力研究者、同上)

セシル・坂井 (協力研究者、同上)

ソーニャ・カトー (協力研究者、オーストリア政治家、ユニ・カトー主宰者、加藤周一息女)

西澤忠志 (協力研究者、同上、連絡係)

第二部門 (「手稿ノート」の精査およびデジタルアーカイブ化)

湯浅俊彦 (部門責任者) 鷲巣力、住田翔子、半田侑子、猪原透、西澤忠志 (いずれも同上)

第三部門 (「手稿ノート」の刊行)

第一分科会 (人文書院刊『青春ノート(抄録)』編集)

鷲巣力 (分科会責任者、同上) 半田侑子 (同上) 井上裕美 (協力研究者、人文書院編集者)

第二分科会 (その他の「手稿ノート」の刊行準備)

鷲巣力 (分科会責任者) 住田翔子、ソーニャ・アンツェン、半田侑子 (いずれも同上)

(註) 各分科会に若手研究者を配置したのは、若手研究者の育成を意図したからでもある。

4. 研究成果

(1) 2017(平成29)年度

「手稿ノート」研究とデジタルアーカイブ化構築：《Journal Intime 1948-1949》《Journal Intime 1950-1951》『狂雲集 註』《Notes on Arts》『1968 1969』『詩作ノート』の6冊。

東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターと本研究を支える加藤周一現代思想研究センターとの間で研究提携の協定書を締結。丸山研究センターの川口雄一は加藤研究センターの客員協力研究員に就き、研究会で「丸山眞男研究の推移」について報告した。

また『丸山記念研究センター報告』(第13号)に代表研究者の鷲巣が「加藤周一文庫と加藤周一の方法」を寄稿した。さらに山口昌男文庫をもつ札幌大学の公開講座に、代表研究者の鷲巣と客員協力研究者の川口雄一が参加して、研究報告を行なった。

加藤と林達夫との比較研究では、鷲巣が中心となり林達夫研究を進め、『イタリア図書』に「林達夫への精神的逍遥」の連載を続けた(7回の連載)。

研究分担者中川成美は『戦争を読む』(岩波新書)を刊行した。

第2回加藤周一記念講演会に：講師＝フランス哲学の浅田彰、演題は「普遍的知識人の時代は終わったのか」、加藤がもつ現代的意義について論じた。

研究会では、上記の川口雄一の報告のほか、猪原透協力研究員の報告「科学史研究と加藤周一」、石塚純一協力研究員の報告「網野善彦、山口昌男、加藤周一」が行なわれた。

(2) 2018(平成30)年度

『日本文学史 古代』『日本文学史 平安』の2冊をデジタルアーカイブ化して公開。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターとの学術協力協定に基づき共同企画展「君たちはこれからどう生きるか 丸山眞男と加藤周一から学ぶ」を開催

同上企画展に合わせてトークセッション(鷲巣力研究センター長・渡辺浩丸山文庫顧問)を東京女子大学で行なった。

加藤周一文庫運営委員会顧問の樋口陽一が丸山眞男記念講演会で「リベラル・デモクラシーの現在」と題した講演を12月に行なった。2019(平成31)年に同書名で岩波新書として刊行された。

加藤周一歿後10年に当たって10月に立命館大学「土曜講座」と第3回加藤周一記念講演会とを兼ねて4回の連続講演会を開いた。寺島実郎「戦後日本と加藤周一」、三浦信孝「加藤周一と1934年生まれ世代」、君島東彦「加藤周一の平和主義」、中川成美「加藤周一のパリ思索的逍遥」。

刊行物：鷲巣力著『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』(岩波書店)、鷲巣力・渡辺考編著による『加藤周一 青春と戦争』(論創社)、加藤周一研究センターの若手スタッフや立命館大学の学生・院生12人が参加した。

研究会：鈴木貞美「加藤周一から学んだこと」、福井優(立命館大学院生)「加藤周一における精神の建築」「文化接触」をめぐる問題」、桜井均「映像にみる加藤周一の説得力」。

(3) 2019(平成31-令和元)年度

デジタルアーカイブ化は6冊。：『日本文学史 中世』『日本文学史 江戸』『京都 奈良1957』『タシュケント1958』『晩香波日記』『中華人民共和国1971』。

第4回加藤周一記念講演会：講師は海老坂武氏(元関西大学教授)、演題は「加藤周一における日本文化への視線」、参加者は200名を超えた。

加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム開催(東京・日仏会館と共催)。9月21、22日に東京日仏会館にて「加藤周一の知的遺産と世界のなかの日本」と題したシンポジウム。その第二部の「私たちが加藤周一に負うもの」の司会を代表研究者の鷲巣が務めた。

23日には立命館大学加藤周一現代思想研究センターと同人文科学研究所の主催で「東アジアにおける加藤周一」と題したシンポジウムを催した。

奈良勝司(広島大学)「近代日本の対外観と西洋理解」

孫歌(中国・社会科学院)「対談における加藤周一」

池澤夏樹(作家)「『日本文学史序説』を読む」

李成市(早稲田大学)「韓国から見た雑種文化論」

ソーニャ・カトー「挨拶」

パネルディスカッション「雑種文化論と韓国・中国・日本」

司会＝小関素明(立命館大学)、パネラー＝林慶澤(韓国・全北大学)

王中忱(中国・清華大学)、樋口陽一(東京大学、加藤周一文庫運営委員会顧問)

なお、国際シンポジウムの講演録集が2020年9月に水声社から刊行予定。

研究会：12月に客員協力研究員落合勝人の報告「加藤周一と林達夫」。

刊行物：『加藤周一 青春ノート』(人文書院、5月)を研究メンバーの鷲巣と半田侑子の共編著として刊行。さらに鷲巣力編『加藤周一 称えることば 悼むことば』(西田書店、9月)を刊行した。ともに立命館大学が所蔵する資料の精査ゆえに刊行できた書である。

丸山眞男研究センターとの共同企画「おしゃべりから始まる民主主義」を9月に公開。図書館との共催で9月から毎月公開講演会「『羊の歌』を読む」を始めたが好評で、市民の参加者が徐々に増えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 加國尚志	4. 巻 665
2. 論文標題 野生の知覚、なまの知覚 後期メルロ=ポンティ「研究ノート」における知覚経験の位相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 48 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦信孝	4. 巻 89号
2. 論文標題 イヴ=マリ・アリューへのアデュー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 297 - 324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神保太郎（桜井均の筆名）	4. 巻 84巻5号
2. 論文標題 「三・一独立宣言」が駆け抜けた百年の孤独	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 58 - 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神保太郎（桜井均の筆名）	4. 巻 84巻7号
2. 論文標題 「改元」、次は「改憲」か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 64 - 68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神保太郎 (桜井均の筆名)	4. 巻 85巻1号
2. 論文標題 安倍政権の本性を暴く追及 桜を見る会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 70 - 74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲巣力	4. 巻 60
2. 論文標題 林達夫への精神史的逍遙 (8)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イタリア図書	6. 最初と最後の頁 2 - 10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小関素明	4. 巻 117
2. 論文標題 近代日本の公権力と戦争「革命」構想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 5 - 217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中川成美	4. 巻 30巻3号
2. 論文標題 戦時性暴力と文学の関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 19 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦信孝	4. 巻 87
2. 論文標題 日仏会館と人文社会科学 現代フランス研究と批判的日仏比較の視座から(上)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 166 - 181
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦信孝	4. 巻 88
2. 論文標題 日仏会館と人文社会科学 現代フランス研究と批判的日仏比較の視座から(下)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 120 - 136
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲巢力	4. 巻 56
2. 論文標題 林達夫への精神史的逍遙(5)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 イタリア図書	6. 最初と最後の頁 10頁、17頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲巢力	4. 巻 57
2. 論文標題 林達夫への精神史的逍遙(6)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 イタリア図書	6. 最初と最後の頁 28頁、36頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲巣力	4. 巻 58
2. 論文標題 林達夫への精神的逍遙(7)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 イタリア図書	6. 最初と最後の頁 2頁、11頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲巣力	4. 巻 13
2. 論文標題 「加藤周一文庫」と加藤周一の方法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 丸山眞男記念比較思想研究センター報告	6. 最初と最後の頁 50頁、65頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷲巣力	4. 巻 38
2. 論文標題 活きた文庫を目指して 加藤周一文庫の現在と将来	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 個人文庫をもつ大学 その意義と可能性	6. 最初と最後の頁 6頁、30頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加國尚志	4. 巻 3号
2. 論文標題 メルロ=ポンティとイメージの問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 形象	6. 最初と最後の頁 44頁、64頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加國尚志	4. 巻 第14号
2. 論文標題 キアスム、非連続の連続 西田哲学と後期メルロ=ポンティ存在論の接するところ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西田哲学会年報	6. 最初と最後の頁 72頁、84頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加國尚志	4. 巻 第7巻
2. 論文標題 抽象芸術と感情 アンリの生の減少額とリオタールの崇高 前衛論から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 21頁、39頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川成美	4. 巻 特別号
2. 論文標題 文学と情動 発見としてのプロレタリア文学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 31頁、41頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 14件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 樋口陽一
2. 発表標題 加藤周一は「洋学紳士」か、それとも「日本人論」者か？
3. 学会等名 加藤周一の知的遺産と世界の中の日本（日仏会館主催）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三浦信孝
2. 発表標題 ヴァレリーを読む加藤周一
3. 学会等名 加藤周一の知的遺産と世界の中の日本（日仏会館主催）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小関素明
2. 発表標題 パネルディスカッション：雑種文化論韓国・中国・日本
3. 学会等名 東アジアにおける加藤周一（立命館大学加藤周一現代思想研究センター主催）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷺巣力
2. 発表標題 加藤周一文庫と「加藤周一の方法」
3. 学会等名 「人間主義的思想家」加藤周一を偲ぶ（京都工芸繊維大学主催）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 贖罪は死者への悼みか　いとうせいこう『想像ラジオ』を起点に
3. 学会等名 Lire la Littérature japonaise a la lumière de l'après 11 mars（フランス国立東洋言語文化学院主催）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加國尚志
2. 発表標題 Not Touching Him, Merleau-Ponty : Around Derrida's Lecture of Merleau-Ponty
3. 学会等名 Symposium on "Phenomenology and (Post-)Structuralism" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加國尚志
2. 発表標題 錯綜体、潜在性 市川浩身体論再考
3. 学会等名 日仏哲学会プレ・イベント企画「見果てぬ哲学」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小関素明
2. 発表標題 明治維新とは何か? 王政復古論
3. 学会等名 明治維新150周年記念連続公開セミナー(第7回)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 国家は誰のものか 災禍のなかの文学的想像力
3. 学会等名 日本近代文学会(6月例会)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 戦争を読む
3. 学会等名 京都弁護士会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 加藤周一のバリ 思索的逍遙
3. 学会等名 第3255回立命館大学土曜講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 林芙美子とカーアン・ブリクセン
3. 学会等名 おのみち林芙美子記念館主催国際交流・文化講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口陽一
2. 発表標題 リベラル・デモクラシーの現在 その中で日本国憲法を「保守」する意味
3. 学会等名 東京女子大学丸山眞男文庫記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦信孝
2. 発表標題 加藤周一と1934年生まれ世代 樋口陽一、海老坂武、大江健三郎、西川長夫
3. 学会等名 第3253回立命館大学土曜講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加國尚志
2. 発表標題 メルロ=ポンティにおける現象学と形而上学
3. 学会等名 土井道子記念京都哲学基金シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 感情的倫理性としての転向 Tenko as emotional ethics
3. 学会等名 イギリス・リーズ大学「転向：歴史、文化、政治性」（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 Literature as Visual Art : Imagination and Visuality 3/ 11
3. 学会等名 ヨーロッパ日本学会（EAJS）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 旅する文学 国を越えるということ（旅行的文学）（所謂穿越国境）
3. 学会等名 台日韓当代作家研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 ディスカッサント「Coerced Beliefs and Willing Conversions: Tenko Literature in Pre-and Postwar Japan
3. 学会等名 アメリカアジア学会（AAS）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 加藤 周一（鷲巢 力、半田 侑子編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 346
3. 書名 加藤周一青春ノート 1937-1942	

1. 著者名 樋口陽一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 202
3. 書名 リベラル・デモクラシーの現在	

1. 著者名 中川成美、編者：安倍オースタッド 玲子、アラン・タンズマン、キース・ヴィンセント	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 298
3. 書名 漱石の居場所	

1. 著者名 湯浅俊彦（共著）、村上征勝、金明哲、小木曾智信、中園聡、矢野桂司、赤間亮、阪田真己子、宝珍輝尚、芳沢光雄、渡辺美智子、足立浩平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 850
3. 書名 文化情報学事典	

1. 著者名 神保太郎（桜井均の筆名）、『世界』編集部	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 480
3. 書名 メディア，お前は戦っているのか	

1. 著者名 三浦信孝（共著）、アルバム・クローデル編集委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 136
3. 書名 詩人大使ポール・クローデルと日本	

1. 著者名 加藤周一（著）、鷲巣力（編・解説）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 西田書店	5. 総ページ数 -
3. 書名 讃えることば 悼むことば	

1. 著者名 中川成美（編纂・校訂）、福井辰彦（編纂）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 520
3. 書名 山田美妙集第7巻	

1. 著者名 中川成美・村田裕和（共編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 376
3. 書名 革命芸術プロレタリア文化運動	

1. 著者名 中川成美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国文学資料館	5. 総ページ数 256
3. 書名 第42回国際日本文学研究集会会議録(冊子)	

1. 著者名 三浦信孝・塚本昌則（共編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 362
3. 書名 ヴァレリーにおける詩と芸術	

1. 著者名 三浦信孝・福井憲彦（共編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 231
3. 書名 フランス革命と明治維新	

1. 著者名 中川成美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 197
3. 書名 戦争を読む 70冊の小説案内（単著）	

1. 著者名 鷲巣力	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 加藤周一の再発見 『羊の歌』を読みなおす（単著）	

1. 著者名 湯浅俊彦（編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 出版メディアパル	5. 総ページ数 208
3. 書名 大学生が考えたこれからの出版と図書館 立命館大学文学部湯浅ゼミの軌跡	

1. 著者名 （共著）湯浅俊彦、前田章夫、塩見昇、石塚栄二、大庭一郎、原田安啓、福井佑介、家禰淳一、村岡和彦、西村君江、志保田務、山本淳一、山田美雪、中村恵信	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本図書館研究会	5. 総ページ数 234
3. 書名 読書の自由と図書館 石塚栄二先生卒寿記念論集	

1. 著者名 （共編著）鷲巣力、半田侑子、加藤周一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 加藤周一「青春ノート」（抄録）	

1. 著者名 （共編著）鷲巣力、渡辺考	4. 発行年 2018年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 加藤周一 その青春と戦争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加國 尚志 (Kakuni Naoshi) (90351311)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	小関 素明 (Ozeki Motoaki) (40211825)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	中川 成美 (Nakagawa Shigemi) (70198034)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	樋口 陽一 (Higuchi Youichi) (60004149)	東京大学・大学院法学政治学研究科(法学部)・名誉教授 (12601)	
研究分担者	三浦 信孝 (Miura Nobutaka) (10135238)	中央大学・その他部局等・客員研究員 (32641)	
研究分担者	桜井 均 (Sakurai Hitoshi) (80595851)	立正大学・人文科学研究所・研究員 (32687)	
研究分担者	湯浅 俊彦 (Yuasa Toshihiko) (70527788)	追手門学院大学・国際教養学部・教授 (34415)	
研究分担者	渡辺 公三 (Watanabe Kouzou) (70159242)	立命館大学・先端総合学術研究科・教授 (34315)	削除：平成30年1月24日